

ジョン・キーツとゲニウス・ロキ

John Keats and his Genius Loci

Yoko Komoto

甲元 洋子

要 旨

「ゲニウス・ロキ（土地の精霊）に訊け」という言葉がある。18世紀の詩人ポープが作品の中で述べた言葉で、英国では造園の重要語とされている。この語に示される精神は英国ロマン派詩人、キーツの詩想の成熟にも当てはまる。キーツに造園の趣味があった訳ではない。しかし庭はキーツの身近に常にあり、また彼自身、ガーデニングや植物学を学んだ時期があった。庭や植物への言及に注意しながらその作品を辿ってゆくと、キーツを大きく成長させた感情と理性の相克、具体的には現実忌避と現実受容をめぐる苦悩のプロセスは、結局、彼にとっての「ゲニウス・ロキ」発見に至る道であったということが解る。キーツの傍らにあったのが、城や貴族の館に付属する広大な庭園ではなくて野菜や果物を採ったり薬草の研究をしたりする為の実用の庭であったこと、また1818年に湖水地方やスコットランド等を徒歩で旅行して現地風の土や人々の暮らしぶりを、頭ではなく肌で感じて具体的に理解したことの意味は大きい。彼の目は、地に足を着け地を耕して生きる人間の根源的な在りようへと一層明確に向けられた。キーツの探り当てたゲニウス・ロキは、文字通り、英国という彼の故国の風土であり、自らの手で地を耕し植物を稔らせ、それを糧として生きる人々の、平凡な、しかし大地に根付いた着実な暮らしであり、彼らが作る小さなコテージ・ガーデンであった。1819年の秋に書かれた最高傑作「秋に寄せて」にそれを読み取ることができる。

キーワード：ゲニウス・ロキ、有用の庭、空想、現実

序：「ゲニウス・ロキに訊け」

「ゲニウス・ロキに訊け」という言葉がある。ゲニウス・ロキ (genius loci) とはラテン語で“spirit of the place”の意である。元々はローマ神話における「土地の守護霊」を表す用語であったが、近代においてはもっと広く、土地固有の気候風土、雰囲気などを指して用いられる。詩人アレキサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) は、書簡詩“Epistle to Burlington” (1731) を通して、建築や造園に深い関心を持つ友人のボイル (Richard Boyle, 3rd Earl of Burlington) に作庭についての助言を与えた際、「ゲニウス・ロキに訊け」を“Consult the Genius of the Place”という英語表現にして次のように述べた。

Consult the Genius of the Place in all;
That tells the Waters or to rise, or fall,
Or helps th' ambitious Hill the heav'n to scale,
Or scoops in circling theatres the Vale,
Calls in the Country, catches opening glades,
Joins willing woods, and varies shades from shades,
Now breaks or now directs, th' intending Lines; (57-63)¹

土地の精霊に伺いをたてること、即ち、その土地の性質を尊重し、作り手の人間の意向をそれに合わせるのが造園の要諦だとポープは言うのだ。「風景式庭園」というイギリス独自の造園形式が生まれるのが18世紀。ちょうどポープが活躍した時代である。英国の庭造りが、異国の庭を模倣する段階から自国の庭園を造る段階へ進んだのは、ゲニウス・ロキの言葉に耳を傾け、それに従って庭をデザインした結果であった²。

英国ロマン派の詩人キーツ (John Keats, 1795-1821) は、短い清貧の生涯を通じて、結婚せず、自分の家も、当然庭も持たず、住む場所を転々と変え、最後は結核の転地

療養のためイタリアに赴き、スペイン広場を見下ろすローマの宿の一室で世を去った。家も庭も持たぬまま諸々のトラブルと悪戦苦闘しつつ詩作の道に精進し、26歳で夭逝したキーツには庭作りを楽しむ余裕はなかった。作品の中での庭への言及もさほど多くない。況や彼が「ゲニウス・ロキに訊け」という庭作りの要帝とされるフレーズを知っていたとは思えない。

しかしキーツが真の詩人として成長を遂げるのは、現実受容に至るまでの試行錯誤を通してであり、その過程は正に彼が自分の「ゲニウス・ロキ」についての探求を深める道であったと言える。自分の家の庭ではなかったが、学校の庭や薬草園という形で庭、それも人間の暮らしと密接に結びついた実用の庭が彼の傍にあったことは確かであり、彼自身もその庭から、あるいは植物や自然そのものとの関わりから直接・間接に影響を受けた。現実を厭い現実から遊離して理想を追うという段階を経て、キーツは現実を見据え、それを有りの儘に受け入れるようになって行った。それはまた、遠くにばかり視線を彷徨わせるのではなく近景に目を向け自分の足元をしっかりと見るようになった、ということでもある。このプロセスを経て、例えば1819年の「秋に寄せて」(“To Autumn”)のような傑作が生まれたのである。「ゲニウス・ロキに訊け」は、独り庭造りにのみ当てはまるのではなく、どの分野の活動にも、否、人の生き方そのものに深く関わる指針だと言える。拙論では、キーツの作風の変化を辿りながら庭との関わりにも注意しつつ、彼が探り当てたゲニウス・ロキとは如何なるものだったのかを考えてみた。

1. 花の女神と牧神の国

キーツはロンドンの下町の貸し馬車屋の長男として生まれた。その環境について Timothy Hilton は、“John Keats’ earliest years would have been spent among the warming bustles of hospitality, of coming and going, of steaming horses in the cobbled yard” (5) と推測している。幼いキーツが過ごしたのは、頻繁に人や馬が出入りする活気に満ちた喧騒の中であった。「丸石で舗装された中庭」は馬たちの居場所であり、植栽を楽しむ為の空間ではなかった。

キーツが、まともな庭のある環境に身を置くのは、8歳でロンドン郊外のエンフィールド (Enfield) にあった私塾に入学してからである。この学校の校長、ジョ

ン・クラーク (John Clark) は開明的な教育者で「偏狭でも実用偏重でもなく、開けた、温かな、まじめな」(Coote 11-12) 教育を施すことを目指していた。Stephen Hebron はこの学校について *John Keats* の中でこう書いている。

Enfield School now became Keats's real home. Here his parents had made good choice. While his contemporary Percy Bysshe Shelley endured flogging and bullying at Eton, Keats enjoyed a more enlightened regime. (10)

Nicholas Roe も *John Keats* において次のような興味深い説明をしている。

... instead of the floggings Coleridge and Hunt endured at Christ's Hospital, Enfield boys were encouraged to keep records of their own behavior ... Unlike the traditional curriculum at Harrow, teaching at Enfield was practical, up to date and ranged through astronomy, botany, the classics, French, gardening, history, mathematics, mechanics and optics. (22-23)

子供達が学齢期に達した時、キーツの両親は迷った末にパブリック・スクールではなくこの私塾に彼らを送ることに決めたのだが、その選択は正しかった。パブリック・スクールでは教師による体罰や生徒間の苛めが慣習化し、そこで学んだために子供時代に辛い思いをした詩人が多い。だがキーツはその苦勞をせずに済んだ。また Roe の解説にあるように、この学校では時代に即した実用的な分野も取り入れてカリキュラムが生まれ、キーツは広範囲にわたる勉強をしたことが解る。「ガーデニング」も教科の一つであったことは興味深い。キーツがこの学校に入って間もなく父親が落馬事故で死亡し、その後母親の再婚や財産問題などで家庭は揉めた。しかしエンフィールドの学校が、謂わば緩衝地帯の役目を果たしてくれたお蔭で、少年キーツはそういった諸々のトラブルに直接巻き込まれずに済んだのである。キーツはのびのびと過ごして勉強に専念した。校長の息子、Charles Cowden Clark という良き年長の友を得、その感化で文学の魅力に開眼したことも幸いであった。エンフィールドの学校でキーツは恵まれた日々を過ごすことができたと言える。

この C. C. クラークが、学校の庭について備忘録に次のような説明文を残している。

... a garden one hundred yards in length, where in one corner were some small plots set aside for certain boys fond of having a little garden of their own, that they might cultivate according to their individual will and pleasure; ... at the far end of the pond, beneath the iron railings which divided our premises from the meadows beyond, whence the song of the nightingales in May would reach us in the stillness of night, there stood a rustic arbour, where John Keats and I used to sit and read Spenser's "Faerie Queene" together, when he had left school, and used to come over from Edmonton, where he was apprenticed to Thomas Hammond the surgeon.³

縦も横も「長さが100ヤード（約900メートル）」とすれば、かなりの広さになる。その広い庭の一隅には、園芸を好む生徒らが自由に植物を植えて楽しめる区画も設けられていたと言うのだが、ガーデニング好きの生徒たちの中にキーツがいたのではなさそう。ここにはそれについての言及はない。だが、授業で庭作りについて学んだことは事実であるし、少年キーツの傍らには広い庭があり、実際に庭作りを楽しむ仲間もおり、またその先には長閑な田園風景が広がっていて毎日それを目にしていた。卒業してからもキーツは度々、居心地の良いこの古巣を訪れている。上記の文にもあるように、庭の池のほりにあるあずまやで、夏の夜にはナイチンゲールの声を聞きながら、C. C. クラークと一緒に、16世紀の詩人スペンサー（Edmund Spenser, 1552-99）が書いた『妖精の女王』（*Faerie Queene*）の絢爛豪華な世界に遊んだのだ。キーツにとってエンフィールドの学校は、豊かで美しい文学の世界と直結した知的な安息の場であった。

1812年、16歳のキーツは学校を去り、自立のための第一歩として田舎の外科医の徒弟、さらに1815年からはロンドンのガイ病院（Guy's Hospital）の研修生となり、雑務をこなしながら医学・薬学の勉強に励んだ。ガイ病院研修生時代にも庭は身近にあった。植物学の講義や薬剤師になるための訓練は、病院付属の植物園やロンドンのチェルシー薬草園⁴で行われた。R. S. Whiteによればキーツは「解剖や外科に関する

科目より植物学の方が好き」(32)で、熱心に学んだ。庭を愛でたり庭で遊んだりという余裕は無かったが、講義や実習を通して薬用植物に接し、それらに関する知識を蓄えたのであった。

キーツは研修生としても優秀で、早々に薬剤師の免許を取得した。この段階で彼には薬店経営者という堅実な将来が保証され、さらに勉強を続けて行けば外科医になることも可能であった。しかし彼は、詩人として生きる道を選び、病院を辞めてしまう。この無謀な決断の要因は、一重に文学への傾倒であり詩人という職業への強い憧れであった。エンフィールドの学校で穏やかに暮らしていた頃と違い、日々直面する医療現場の厳しい状況——薄汚い住環境、病院実習生たちの粗野な生活、血膿まみれの汚くて凄惨な医療の実態⁵など——が、キーツの繊細な神経に応えたであろうことは容易に推測できる。キーツはこの厳しい現実から逃げずに職務を果たし、それによって強靱な精神を培って行った。だが同時に、現実とまじめに関われば関わるほど、それとは全く違う美しく快適な世界を求める気持ちも一層強まった。エンフィールドの学校や、C. C. クラークの紹介で知りあった新進気鋭の評論家、リー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) が仲間の文人たちを集めて催すサロンなど、知的で穏やかで美しい環境の中で生きて行きたいというキーツの願望が、彼に文学の道を選択させたのである。

殺伐とした暮らしの中でキーツが慰めとしていたのは、現実とは正反対の、神話や文学作品に描かれる牧歌的世界であった。薄汚い都会の対局である広々とした田舎の自然にキーツは惹きつけられた。懐かしいエンフィールドの学校の庭とその向こうに広がる田園風景、そしてそこでキーツが楽しんだ文学作品の中に描かれる美しい世界。これらが緋い交ぜになって彼の現実逃避的な理想の風景を形成していた。1817年3月、ハントの応援を得てキーツは『ジョン・キーツ詩集』(*Poems by John Keats*) を出版し、詩人としてのスタートを切った。そこに「眠りと詩」(“Sleep and Poetry”) という中編詩が収められているのだが、この作品の中に、キーツが詩人としての将来計画を述べるくだりがある。それによると、まず10年ほどは「花の女神と牧神の国」(101-02) に遊んでその心地良さを存分に味わい、次に「その喜びに別れを告げ……もっと高尚な人生を求めて人間の苦悩のただ中に入る」(122-25) のだと言う。既にこの段階でキーツは、自分の現実忌避傾向を自覚しているし、この儘では大成できないこと

に気付いてもいる。だがそれは頭での理解にすぎず、心情的には「花の女神と牧神の国」からまだ出ていない。

「花の女神と牧神の国」に遊ぶキーツの姿は、1817年の『キーツ詩集』の二番目（一番目は後援者リー・ハントへの短い献呈詩）を飾る「小高い丘の上につま先立って」（“I stood tip-toe upon a little hill”）という詩に見ることができる。新米詩人キーツの志向がよく表われた作品である。この詩が書かれたのは1816年の夏。Milliam Allottの解説によると「ロンドン郊外の丘陵地帯、Hampstead Heathからの眺め」（85）に触発されたのだと言う。タイトルの通り、キーツは丘の上につま先立ちをしている。目の前に広がる眺めをキーツは、「自然の光に満ちた美しい楽園」（126）と表現し、「貪欲な目」（15）でもってその風景を眺め、描いてゆく。自ら認めるように確かにキーツは「貪欲」である。小高い丘という見晴らしの良い地点に身を置きながら、更に「つま先立ち」までして、より遠くへ視線を向けようとしている。キーツは小柄⁶であった。少しでも遠くを、また多くを見たいと思えば必然的に爪先立ちをせざるをえないわけでこれは彼には馴染みの姿勢であったと言える。同時にこの背伸びのポーズは、身の丈に合った所で満足するのではなく、より高次元の世界を覗き、その中に入りたいと願う彼の好奇心や憧れを示唆してもいる。

キーツ自身の姿の縮小版と思えるのが“Here are sweet peas, on tip-toe for a flight / With wings of gentle flush o'er delicate white, / And taper fingers catching at all things / To bind them all about with tiny rings. (57-60)⁷と描写されるスイートピーである。「飛び立たんばかりに爪先立ちして／……先細りの指で全てを掴んでは／それらに巻きついてゆく」スイートピー。か細い指を伸ばし、あれもこれもと多くの物を絡め取らずにはおれないこの小さな植物の執着心がキーツのそれに重なる。蔓植物のリアルな描写や自分の外見と性向をそこに重ねる客観性に、キーツの優れた資質が予見できる。しかし、光るものが散見するとしても、全体として眺めた場合、この作品がまだ熟成の域に達していないことは明らかである。つま先立ちという安定感を欠く姿勢がそのままキーツの精神の不安定さを表しているとも言える。Marjorie Levinsonに至っては、これを“the view of the peeping Tom”（240）と同一視する。「覗き趣味」とまで言うのは行き過ぎだとしても、そういう指摘を誘発したのはこの詩の弱点であろう。変質者呼ばわりされるほどに物色に余念のないキーツなのだが、彼がこの詩で

最も主張したかったのは、目の前に広がる現実の風景の美しさではなかった。

I gazed awhile and felt as light and free
 As though the fanning wings of Mercury
 Had played upon my heels; I was light-hearted,
 And many pleasures began to my vision started.
 So I straightway began to pluck a posy
 Of luxuries bright, milky, soft and rosy. (23-28)

上記の引用が示すように、美しいハムステッド・ヒースの夏の朝の情景が眼前にありながら、キーツはそれを空想世界へ飛翔するためのスプリング・ボードに利用しているだけなのである。キーツにとってはマーキュリーの羽が生えたように心が軽くなり、色々な幻が浮かんでくることが大事なのであった。空想の世界に咲く「鮮やかで、愛らしい、柔らかな、薔薇色をした贅沢な／花の束」(27-28)を摘むのだとキーツは言う。美しいけれど実態のない軟な花ばかりである。キーツもまた、幻の花と同じで大地に根づいておらず浮足立っている。作者の感性が若く瑞々しく、作品の雰囲気もソフトで美しいということはよく解るが、人間に通底する真理の片鱗を掬い取っている訳でもない。早晩、読者との乖離が生じることは明らかだ。

1817年4月から11月まで、キーツはギリシャ神話から題材を得た長詩『エンディミオン』(*Endymion*)の執筆に集中した。理想美の象徴である月の女神を追い求めて、美青年エンディミオンが地中、海中、天空を彷徨する壮大な物語詩である。この野心作が終盤に入った10月8日、友人に宛てた手紙の中でキーツは詩を庭に譬えて次のように述べている。

Do not the Lovers of Poetry like to have a little Region of wonder in where they may pick and choose, and in which the images are so numerous that many are forgotten and found new in a second Reading: which may be food for a Week's stroll in the Summer? (Rollins, I, 170)⁸

余りにも花の種類が多いので散策する人が全てを見覚えることができず、既に見た花を初めて見る花だと思い違ってしまうような「ちょっとした驚きのスペース」。「夏に一週間くらいぶらつくのに適した」という表現もあるので「ちょっとした」と言えどもかなり大きな庭をキーツは思い描いていることが解る。色とりどりの各種様々な華麗な花が咲き乱れる大きな庭。美しいと言えば美しいが、目移りがして纏まりがなく落ち着かない印象も受ける。『エンディミオン』はそのような作品であった。S. M. Sperry が “The allegory of *Endymion*” という論文の冒頭で、この詩を “labyrinthine and overgrown, a little wilderness amid whose tangles one can wander happily but at the risk of becoming lost” (67)、即ち「草木が繁りに繁った迷宮」で「そこを彷徨うのは面白いが迷子になる危険性もある」と評しているのは言い得て妙である。

『エンディミオン』を完成させて数カ月が経った2月27日、キーツは “...if Poetry comes not as naturally as the Leaves to a tree it had better not come at all.” (Rollins, I, 238) という言葉を手紙に記す。「木に葉が生えてくるように自然に」という表現はやや陳腐ではあるが、植物学が好きで草木のこともよく知っているキーツならではの経験に裏打ちされた言葉だとと言える。同じ手紙の中に “I am anxious to get *Endymion* printed that I may forget it and proceed.” (Rollins, I, 239) という厳しい自己評価も示される。『エンディミオン』は「忘れて前進するため」の通過点でしかなかった。長編詩を書くというのは、若い詩人が抱くに相応しい大望である。キーツは後に『ハイペリオン』(*Hyperion*, 1818年)、『ハイペリオンの没落』(*The Fall of Hyperion*, 1819年) という長編詩も手掛けるが、書き続けることが出来ず途中で放棄した。曲がりなりにも完成できた長詩は『エンディミオン』だけであった。キーツは野心に駆られ遮二無二この作品を書き上げたが、かなり無理があったことは否めない。大昔の神話や牧歌世界の中に様々な神や美しい男女を配置して華麗で長大な物語を編んで行くこと自体にキーツは食傷し、行き詰まりを感じ始めていたようだ。内容と手法が十分に練られた後に自ずから発芽した作品ではないことをキーツが一番よく知っていた。師と仰いだハントとも齟齬が生じ、キーツは彼とそのサークルの脆弱な詩想に限界を感じ始めた。「忘れる」という言葉からキーツの忸怩たる思いを読みとることができる。「花の女神と牧神の国」に10年留まりたいとキーツは言っていたが、それよりもずっと早くこの美しい世界に見切りをつけたのである。

2. 夏の旅

1818年3月13日、キーツは英国南西部のデヴォン州から友人に宛てて“Scenery is fine — but human nature is finer” (Rollins, I, 242) と書き送った。雨に降りこめられて嫌気がさしたキーツは、当地の天候を呪詛するのだが、これはその中で発言である。しかし、単に雨に視界を遮られ、これと言った眺めも楽しめず面白くなかったからキーツの関心が「風景」から「人間性」へと移行したのではない。この背景には「ピクチャレスク」という、上流階級の人々の間で大流行した趣味⁹に対するキーツの批判もあるのだ。「絵のようだ」と評される景勝地、例えば湖水地方やスコットランド高地地方に赴き、好みの風景があるとセピア色の少し凸面にされた硝子で作られた楕円形の鏡をかざす。すると鏡には、如何にも楕円形の額縁に入った古い絵画のように景色が映る。それを眺めて悦に入る。有閑階級は物見遊山の旅に出てはこんな遊びをして楽しんでいたのである。この流行は短命で19世紀に入ってすぐに終息してしまうのだが、キーツの上記の言は「そのバカバカしさ」(川崎 86) を見抜いた「ドライなコメント」(川崎 114) なのである。実はこの頃キーツにも、友人と二人で正にその湖水地方からスコットランド方面を巡る旅の話が持ち上がっていたのだ。貧乏な青年二人は、食費も宿泊費も切り詰め、乗り物の利用は極力避けて殆どを徒歩に頼る質素な旅を計画した。キーツが慣れ親しんでいる英国南部と違って地形も起伏に富み、気候風土も厳しい英国北部を歩いて回るのである。美景探しの気楽な旅とは訳が違う。「花の女神と牧神の国」を出て精神成長の途上にあるキーツは最早この旅に甘い期待は抱かなかった。それなりの覚悟を決めたキーツに、気に入った風景の上っ面だけを撫でて通るような自然との接し方が誠にバカバカしく感じられたのは当然である。「風景よりも人間性云々」は、これらを踏まえての発言でもあったのだ。

6月24日に始まり8月半ばまで続いた約2カ月にわたる強行軍の旅をキーツは十分に楽しみ、多くの新たな発見をして収穫を得た¹⁰。スコットランド、更にアイルランドで想像を絶する貧困者の暮らしを目の当たりにしたことは彼にとって大きなショックではあったが、過酷な現実を把握し、知見を広めることが出来て非常に有意義な経験となった。また、自分の脚で大地を踏みしめて野山を歩き、自然と深く関わったことも貴重な体験だった。彼の精神は大きな刺激を受けてより活性化された。1818年に彼が経験し学んだことが基礎となって、翌年の1819年の驚異的な実りの年

がもたらされる。

3. 空想という名の庭師

1819年の春の有名なオード群の中から4月に書かれた「サイキに寄せるオード」(“Ode to Psyche”)を取り上げてみたい。サイキとは、恋の神キューピッド(Cupid)の妻の名で、「心」「魂」「精神」等を表すギリシャ語に由来する。このオードの最終連でキーツは、自分が司祭となってサイキを祀る神殿を心の深奥部に建て神事を執り行いたいと考えるのだが、ここに「庭師」が登場する。

And in the midst of this wide quietness
 A rosy sanctuary will I dress
 With the wreathed trellis of a working brain,
 With buds, and bells, and stars without a name,
 With all the gardener Fancy e'er could feign,
 Who breeding flowers will never breed the same; (58-63)

サイキの神殿が建つ地所を「静かな広い場所」とキーツは表現している。限られた肉体の一部でしかないのに広大無辺の世界を想像し得る心。その心の中心にサイキのための「薔薇色の至聖所」があって、そこを「決して同じ花を育てることをしない」「Fancy(空想)という名の庭師が作りだす／蕾や鐘の形をした花々、名前のない星形の花々」で飾るのだとキーツは述べる。

キーツが、空想と言う名の庭師に「同じ花を咲かせることをしない」という特色を与えたのは意味深い。M. L. D'Ananzoが指摘するように、この庭師は「変幻自在、多様性、独創性」(212)の表象であり、従って咲かせる花が新種の「名前のない」ものばかりになるのである。空想が紡ぎ出す豊かさや新奇さが巧みに示唆される。薔薇色の聖域に咲く釣鐘状の花や星の形をした花は具体性に乏しいが美しく繊細である。「小高い丘の上につま先立って」という詩の中でキーツが摘み取っていた「鮮やかで、愛らしい、柔らかな、薔薇色をした贅沢な／花の束」(27-28)と相通じるものがある。あるいはまた、かつて詩の愛好者の為に彼が空想したあの庭に咲く、覚え切れないほ

ど多種多様な、しかし具体的な名前は何一つ示されなかった花々を思い出させる。

だが今、新奇な花を次々と咲かせる空想という名の庭師に向けられたキーツの眼差しは遥かに冷静である。空想という行為の限界が、同名の庭師の花作りを通して示唆されていることに注目したい。批評家たちの丁寧な解釈によりそのことが明らかになる。例えば David Perkins は「名前のない花」に「アイデンティティの欠如」(227)を読み取っているし、次々に新しい花が咲くこの庭を Harold Bloom は「豊かな不毛」(396)と表現する。キーツの脳裏に、空想の庭と現実の庭が対比されていることは明らかだ。S. M. Sperry は *Keats the Poet* において、空想の庭が「秩序や首尾一貫性を殆ど示唆していない」(259)ことを指摘する。S. A. Ende は、二度と同じ花を咲かせないというこの庭師の特色について、例えば無尽蔵の着想という風にポジティブには捉えず、「繰り返しの断念」(127)であるというネガティブな解釈をする。

キーツはエンフィールドの学校で、ガーデニングを、少なくとも授業の一環として学んだ。それ以外にも校庭や実習先の植物園で、庭作りや植栽の様子を頻繁に見ていたはずである。研修生時代に彼が親しんだ庭は、“botanical garden of curative herbs”や“Chelsea Physic Garden”(White, 32)という名から明らかなように、薬用植物を栽培・研究する実用の庭であった。エンフィールドの学校の庭もまた有用の庭であったことが思い出される。かつてリー・ハントが摂政皇太子誹謗の罪で投獄されていたとき、C. C. クラークは、学校の庭で採れた果物や野菜を差し入れてハントの獄中生活を慰めたのであった (Colvin, 43)。このような有用の庭が側にあった訳であるから植物の生命力や存在感は言わずもがな、植物全般を管理し、植栽から意匠まで庭に関する全てを一定の秩序の下に統括する庭師の仕事内容も彼なりに把握していたと考えられる。庭作りは気楽な遊びではないという当たり前の事実を踏まえた上でキーツは、秩序も首尾一貫性も度外視した、土や泥の感触が全く感じられない非実用的な空想の庭をこの詩に持ち込んだのだ。空想と言う行為の面白さだけでなく欺瞞性や非生産性も詩人は示唆しているのである。

Helen Vendler は「サイキに寄せるオード」を論じる際に、ゲニウス・ロキという言葉を用いている。“Fancy, this presiding *genius loci*”(62)という表現である。この作品のゲニウス・ロキは空想だと彼女は見なしているのだが、果たしてそうだろうか。確かに空想はキーツを魅了するものであった。「花の女神と牧神の国」を彷徨ってい

た時期は勿論、この領域から出た後の、詩人として成熟の域に達したキーツにとっても、空想が提供してくれる現実から離反した美しい世界は強い牽引力を持っていた。色々な意味でそれが詩作の原動力となっていたことは否めない。非現実界の魅力やそれへの憧れが、形を変え巧みにカムフラージュされてキーツの作品に組み込まれ、そこに独特の美しさや味わいを醸し出していることは確かである。この詩も例外ではない。

だが同時に、サイキの聖所には「働く頭脳の格子垣にからみつく花」(60)もあるとキーツが書いていることを忘れてはならない。空想という庭師を冷静に検分し、その本質を見定める「頭脳」即ち理性も働いているのである。『エンディミオン』を書き上げた後、キーツは、空想が作り出す非現実世界に魅了されながらも同時に、清濁すべてを包み込む現実にはもっとダイナミックな魅力があることを強く意識するようになっていた。だからこそ、空想の脆弱さが目につくのである。同じく1819年の春、「ギリシャの壺に寄せるオード」(“Ode on a Grecian Urn”)において、美と真実(現実)は不可分だという明察を、あの有名な“Beauty is truth, truth beauty”(49)というフレーズで言い表したキーツである。そのキーツが、空想にお伺いを立て、その声に従って詩を作るのか。勿論、空想はまだ居る。しかしそれは「庭師」としてサイキの聖域に名もなき花々を咲かせているにすぎない。1819年のキーツは、空想ではなく現実を自分の本当のゲニウス・ロキとし、その声に耳を傾けながら物事を見、考えるようになっていたのではないか。

春のオード群制作から2カ月ほど経った1819年6月9日、知人宛ての手紙にキーツは印象的な言葉を残している。詩集の売れ行きもさっぱりで、将来への不安を強めたキーツは、この頃外科医としてインド貿易船に乗りこむことを考えたりしたのである。この仕事がキーツの精神の活力を枯渇させるのではないかと相手は心配したらしい。それに対してキーツは、その心配はないと言うのである。自分に関心も共感も持たぬ多くの他人に混じって働くことは精神を強めるのにうってつけであり、新しい環境の中で出会う人々を“the calmness of a Botanist”(Rollins, II, 115)で観察するつもりだとキーツは述べている。船医という職業から、かつて研修医時代に勉強したことが色々連想されたのであろう。「植物学者」という言葉が出てくるのは、如何にもこの分野の勉強が好きだったキーツらしい。厳しい環境の中で「植物学者の冷静さ」を

もって人間観察をするという現実への処し方にキーツの精神の成長が見て取れる。「小高い丘の上につま先立って」を書いた3年前、既にキーツには優れた観察眼や描写力が備わっていた。だがその頃は、はるか遠くへ目をやって美しい物を見つけ、それを飛翔台にしてみっと美しく繊細な非現実世界に入り、そこに咲いている儂い花々を摘み取ることに彼の主力が注がれていた。今のキーツはそうではない。身の回りの現実から目をそらさず徹底的に観察しようとしている。新米詩人だった頃のキーツの不安定な浮足立った姿勢や貪欲なのだが何も見ていないに等しいあの目と比べると、その懸隔は著しい。

1818年以降キーツは、感性と理性の相克の中で苦悩しつつ現実受容への道を進んで来たが、その試行錯誤はキーツの詩想を急速に成熟させた。Cooteの言葉を借りるなら“Keats had undergone the most concentrated and profound development of any poet in the history of English literature” (283) ということになる。「英文学史上のどの詩人よりも深くて濃い成長」を驚くべき速さで成し遂げたキーツ。彼の優れた感性と技量に、十分に熟した精神がプラスされ「秋に寄せて」(“To Autumn”)という恐るべき傑作がやがて書かれることになるのである。

4. 英国の秋

1819年9月21日、英国南部ハンプシャー州の州都、ウィンチェスター(Winchester)において、秋の風景に感銘を受けてキーツは「秋に寄せて」を書いた。静かな秋の一日を背景に、田舎家の佇まいと周囲の風景が淡々と述べられる短い詩である。

「秋に寄せて」は各11行の3つの連から成る。第一連でキーツの目は、朝霧が晴れて温かい陽射しに包まれる農家の庭先に向けられる。所謂「コテージ・ガーデン」¹⁾である。枝もたわわに実る林檎、はち切れんばかりに膨らんだウリやハシバミ、遅咲きの花々とそこに群がって蜜を集める蜂。一日と季節のそれぞれの始まり(朝と初秋)が、美しく喜びに満ちて描かれる。第二連で詩人は目を少し先に向ける。穀物蔵での脱穀や畑の刈り取り。そして林檎酒作り。実りの時期の作業が全て緩慢な動きの中に描写され、昼下がりの、そして秋半ばの、満ち足りてゆったりとした雰囲気醸し出す。第三連で詩人はまず、夕空に茜雲がたなびき、畑の狩り株を薔薇色に染め

る様に目を向ける。一日の終わりの情景である。続いて蚊柱が立てる微かな羽音に言及した後、詩人は専ら「音」に集中する。辺りが暗くなって視界がきかないからである。遠くの丘から聞こえる羊の声。生垣のコオロギの声。菜園で鳴くコマドリの声。そして渡りの為に集まってきたツバメの囀り。それぞれの音が秋という季節の終わりを示唆している。

秋の終りは本格的な冬の到来を意味し、冬の気候の厳しさは容易に死を連想させる。当然キーツもそれを意識し、自分の病気を思い早世の恐怖¹²に怯えたはずだ。しかし彼はそれを忘れるために不老不死・常春の非現実界に逃げようとはしない。確かに、第二連全体を支配する余りに緩慢な動きからは、冬になる前の、謂わば猶予期間ともいえるこの時期を最大限に引き延ばしたいというキーツの切なる願いが透けて見える。また第三連の最後には南の国へ渡ろうとして集合した燕への言及があるが、キーツは内心、暖かい国へ飛んで行ける燕を羨んだことだろう。しかしこれらキーツの個人的な感慨は一切語られない。時は常に流れていて止めることはできないことを認識したうえで尚、その流れの一部である「今」、ここにある秋という「期間」の豊かな実りとそれらを産出した大地の姿を淡々と描くのである。Stephen Hebron は *The Romantics and the British Landscape* の中で“we are given the intimate, more expressive details of an autumn landscape, which Keats conveys with transparent clarity” (93) と述べている。誠にその通りで、季節を統べる女神的存在として擬人化された美しい秋が描かれるわけでなく、くだけた説明や装飾の言辞もない。平凡な秋の眺めとその中に在る身近な事象が、この季節の空の色や澄んだ冷気を思わせる「透き通った明晰さ」の中に描写されてゆくだけである。この静謐と爽快感はキーツの安定した心理状態の表れでもあろう。この時期、ウィンチェスターの気候が極めて良好であったことは Bate が *The Song of the Earth* の中で詳述する (102) とおりである。1819年8月7日から9月22日までの47日間のうち38日が晴天に恵まれ、特に9月15日から22日までの一週間は気温も高めで15℃台であった（それ以前の3年間は平均気温が10℃）。快適で過ごしやすく体調も良好であったのでキーツは現実に満足し、現実に即した落ち着いた詩を書いたと考えることもできる。

だがこの安定感は決して一過性のものではなかった。医学の知識を持っていたキーツは、自分が長生きできぬことを予測していた。死を前にしての感傷だと言ってしま

えばそれまでだが、この頃彼は自分が生まれた国、英国に対して切情を持つようになっていく。「うぶすなの地へのいとおしみ」(赤川 158) とでも言うべき静かな、しかし揺るぎない感情である。「秋に寄せて」を書いた9月21日、友人に宛てた手紙の中でキーツは、不遇のうちに早世した詩人チャタトン(Thomas Chatterton, 1752-70)に触れて“*He is the purest writer in the English Language.*”(Rollins, II, 193)と書いている。フランス語やラテン語など外国語の要素が混じりこんでいない「純粋な英語で詩を書いた」この詩人をキーツは“*somehow associate Chatterton with autumn*”(なぜか秋と結びつけてしまう)のだと言う。澄み切ってひんやりとした秋の空気がチャタトンの混じり気のない純粋な英語の美しさに結びつき、長閑な田園風景の美しさと一緒にキーツの国土への親しみを強めたのである。

「秋に寄せて」はキーツの「土」との親和を感じさせる詩である。遠景や空への言及もあるが、それらに惹かれて詩人の目や心の焦点が足許の地面から逸れてしまうことはない。非現実世界への飛翔とは逆のベクトルを示す詩である。中心に据えられているのは一軒の農家。土に馴染み、それを耕して植物を実らせ収穫し、その蓄えを糧として冬に耐え新しい春を迎えるという暮らしがそこで繰り返される。それは人間の原初のライフ・サイクルである。ここにキーツは照準を合わせている。稔りの秋の穏やかな風景は、大地に根付いた生活の落ち着きや充実感を読者に印象付けるが、それはキーツの思いでもあった。どこか遠い所に理想郷があるのではなく、変わり映えのない日常生活が繰り返されているこの目の前の現実の世界が、実はその儘で理想郷にもなっているということをキーツは実感している。現実を冷静に観察して正確に認識する植物学者の目、日常の暮らしの中に潜む稀有な美を見出す知性と感性、そしてその美を巧みに描く技量。これらが揃い万全の態勢が整って、この傑作が生まれたのだと言える。「美は真であり、真は美である」という金言の具体化された形をキーツは秋の眺めの中に見出したのだ。

5. 結び：「暗い地面に顔を伏せて」

「サイキに寄せるオード」や「秋に寄せて」を論じる中で Vendler は、キーツが親しんだミルトン(John Milton)の『失樂園』(*Paradise Lost*)から「エデンの園」の描写を引き合いに出し、それが“*agriculture and gardening*”からなる世界であって

“indolence”とは無縁であることに注意を喚起する(239)。ミルトンは、全てが叶う楽園の庭であっても、そこに空想を庭師として入れることをしなかったのだ。この大詩人には庭というものの本質がキーツ以上によく解っていたということである。知性と勤勉なしにそれを維持することはできないと言う基本事項を、ミルトンはしっかりと押さえていたのである。楽園に於いてであっても、そこで遊ぶ人ではなく「農作業や庭作り」に携わる人としてアダムとイブが捉えられていることも面白い。「怠惰」を厭うミルトンのピューリタン詩人らしいストイシズムが伺われる。

庶民の出であるキーツが身近に見てきたのもまた、人間の知恵や労働によって作られ維持される庭であった。彼は大きな庭を有する立派な屋敷に住んだことは一度もなかった。例えば『イザベラ』(*Isabella*, 1818年4月)、『聖アグネスの前夜』(*The Eve of St. Agnes*, 1819年2月)、『レイミア』(*Lamia*, 1819年6月)等、豪華で贅沢な住環境を背景にして物語が進んで行く詩においても、キーツは主人公たちの住む屋敷の庭までを細々と書くことはしていない。広大な庭を造らせ、それを眺めて楽しむ有閑階級の人々の生活とは無縁であったからであろう。キーツ自身は、享乐的な贅沢な暮らしよりも、例えば日々土を耕して暮らす地味で着実な生き方に馴染む人であった。庭を逍遥して遊ぶ人ではなく、むしろその庭を実際に作る側の人間に彼は近かった。その点で彼は、同じロマン派の若手旗手のシェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)と対極を成している。Gavin Bantockは、この二人の詩人を並べて“Keats seems to lie with his face to the dark earth, and Shelley on his back gazing into the blue sky.”(152)と述べている。「仰向きに寝て青空に見入っていた」シェリーと「暗い地面に顔を伏せて横たわっていた」キーツ。キーツが項垂れて夢想を専らにしていたということでは決してない。キーツの思いは常に現実の身近な人々や事象に向けられていた。アメリカに移住した次弟夫妻、厳しい後見人によって自分との面会を禁じられている妹、1818年の末に出会った恋人(婚約はするが結婚に至らなかった)、そして多くの友人たち。キーツは常に彼らを気づかい、質素な生活に甘んじ、周囲に迷惑をかけるような自分勝手な行動はしなかった。裕福な家に生まれ我儘一杯に育ち、理想追求のために家族を犠牲にし、無茶をやり尽くした挙句に事故を起こして死んでしまったシェリーの騒々しい自己中心的な一生と、キーツの内省的で静かな一生は対照的である。空を仰いで大言壮語するのではなく、大地にしっかりと足を着け、そこに

生きる人間の現実へと思いを沈潜させてゆくのがキーツの生き方であった。「暗い地面に顔を伏せて」という Bantock の言はそういう意味であろう。キーツの本質を言い当てた至言である。

Bate は、“at-homeness-with-all-living-things” (*The songs of the Earth*, 109) という面白い表現を使って、キーツの「秋に寄せて」という詩が「すべての生物とじっくり調和した」穏やかな雰囲気の中に終わっていることを指摘する。地味で小規模ながらしっかりと人間の暮らしを支える有用の庭と農家の佇まい。そしてそれを取り巻く英国の自然。この中でキーツは、過不足を感じることなく穏やかに充足している。名もなき庶民の小家のささやかなコテージ・ガーデンを描くキーツの筆致が完璧な落ち着きを見せているのは興味深い。

この詩の最後の3行、即ち「生垣の中でコオロギが鳴くかと思えば／こんどは庭の畑からコマドリが優しく歌い／空に燕が群れて囀っている」という箇所について Roe は、*John Keats and the Culture of Descent* の中で“— which may hark back to a formative landscape: the ‘garden-croft’ at Enfield School, scene of Keats’s poetic initiation with Charles Cowden Clarke.” (267) と述べている。長足の進歩をとげた詩人キーツの最高傑作の締めくくりに Roe は、あのエンフィールドの学校にあった庭の存在を感じ取っている。C. C. クラークと一緒に少年キーツが文学の世界に足を踏み入れたあの庭。いわば未来の詩人キーツを「形成した風景」が思い起こされると言うのである。成るほどキーツは、人生の終焉近くになって自分の出発点にもう一度戻ったと言えるのかもしれない。ただしキーツは、その懐かしい庭をあつら夢中になって読んだ華麗な叙事詩に描かれる庭の立派な作りにはなく、身近で実用的な、土の手触りや匂いが感じられる庭として再現したのであった。

キーツの初期作品「小高い丘の上につま先立って」に“Peeping Tomism”を嗅ぎ取った Revinson は、当時のキーツの創作姿勢を“the opposite of both the equal, wide survey — that manly gaze — and the elegant armchair passivity of the mental traveler, the age’s alternate spectatorial form of aristocratic virility.” (240) であるとみなした。「公平で広範な概観 — 雄々しい熟視」や「精神の旅人の優雅な批評家的冷静さ」を、若いキーツに求めること自体が無理な話であって、評価基準が高すぎると言っても良いのであるが、しかし3年後、「秋に寄せて」でキーツは、この「年を重

ねて身に付く男らしい品格のある物の見方」を立派に自分のものにしたことを証明している。実年齢はまだ24歳であったが、精神的に老成したキーツは試行錯誤の末に終の棲家ともいべき彼本来の居場所を見出したのである。

出自、学歴そして体軀も決して立派ではないという事実を踏まえた上で、それでも尚キーツは自分が持つ底力を確信し、現実の小さな自分の存在を肯定することができるようになっていたのではないか。自分自身も含め、全ての事象の有るが儘の姿と、それらが持つ真実の美しさへと意識が集束して行ったのだ。中世の騎士物語の世界でも更に昔の神話世界でもなく、況や非現実空間にある妖精の国でもなくて、今、目の前にある英国の静かな秋の風景。そこに生きて土を耕す人々。彼らの家の小さな豊穡の庭。この現実の風土。これこそが自分の生地であり、自分が依って立つ所であり、自分に相応しい居場所であるのだと、素直にキーツに実感できたのであろう。

翌1820年になると肺結核が進行し、創作活動も儘ならずキーツは療養生活を余儀なくされた。衰弱したキーツは2月24日、手紙にこう記す。

I muse with the greatest affection on every flower I have known from my infancy . . . I have seen foreign flowers in hothouse of the most beautiful nature, but I do not care a straw for them. The simple flowers of our spring are what I want to see again.” (Rollins, II, 260)

死を自覚したキーツがしみじみと懐かしく思い返すのは子供の時から馴染んだ花であって、どんなにエキゾチックでも「温室の中に咲いている美しい異国の花」などには何の関心もないのだと言う。彼が見たいと望んだのは「英国の春に咲くシンプルな花」であった。この手紙を書いてから1年と少し経った1921年2月23日に26歳でキーツは世を去った。

註

- 1 Michael Charlesworth, ed. *The English Garden: Literary Sources & Documents: The Eighteenth Century Opinions, Descriptions, Controversies* Vol. II (East Sussex: Helm Information, 1993) 45.

- 2 英国庭園の変遷については赤川裕『英国ガーデン物語：庭園のエコロジー』（東京：研究社、1997）を参照した。
- 3 C. C. Clark の言葉は Jonathan Bate, *John Keats* Cambridge: Harvard University Press, 1963, p. 11 より引用した。
- 4 Chelsea Physic Garden は、Oxford 大学植物園（1621 年設立）に次いでイギリスで二番目に古い薬草園で 1673 年に薬剤師協会により設立された。現在もロンドンの観光名所の一つとなっている。
- 5 エーテルによる麻酔が使用されるのは 30 年ほど先になる。当時の手術は患者に酒を飲ませ泥酔状態にして行われたが、誠に不完全な麻酔であって手術の現場は凄惨を極めた。研修生たちは階段教室で手術台を遠巻きにして見学するのだが、優秀なキーツは執刀医の助手を務めていたので、この地獄のような有様を間近でまともに見る羽目になった。研修医時代のキーツについては *Asphodel* 42 号（同志社女子大学英語英文学会、2007）の 36-39 頁に詳述した。
- 6 キーツは 1818 年 7 月 22 日の手紙に自分の身長を“five feet”（Rollins, I, 342）と記している。5 フィートは約 152cm である。現代よりも平均身長は低かったとは言え、当時でもキーツは小柄な部類に入った。
- 7 Milliam Allott, *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970) 88.
本論文中のキーツの作品の引用はすべてこの詩集による。
- 8 本論文中のキーツの手紙文はすべて Hyder E. Rollins, ed. *The Letters of John Keats* 2 vols. (Cambridge: Harvard University Press, 1958) から引用した。
- 9 「ピクチャレスク」趣味に関しては川崎寿彦『楽園のイングランド』（東京：河出書房新社、1991）の 82-86 頁を参照した。
- 10 徒歩旅行から戻ったキーツを待っていたのは、肺結核を患っていた末弟トムの病状悪化（3 か月後に死亡）と、批評家たちの手厳しい『エンディミオン』評であった。キーツは酷評を冷静に受け止めトムを看病しながら創作を続けた。これら人生の試練がキーツの脆弱な一面を矯めて詩人としての成長を促したことは言を俟たないが、同様に、自然の中に身を置き自分の脚で歩き回った夏の旅の経験も有意義であった。これについては *Asphodel* 40 号（同志社女子大学英語英文学会、2005）の 10-24 頁に詳述した。

- 11 Bate は *The Songs of the Earth* の中で「秋に寄せて」を論じる際に「コテージ・ガーデン」という言葉を用いている。この詩は“an intensively managed but highly fertile domestic economy in a cottage garden” (109) で始まると言うのである。キーツ自身がコテージ・ガーデンという語を使っている訳ではないが、明らかにこの作品で描かれているのは、小ぶりの実用的な農家の庭、コテージ・ガーデンである。
- 12 キーツは母親と末弟を肺結核で亡くしている。彼自身にも前年の徒歩旅行の際に風邪を引いたのが引き金となって明らかな結核の兆候が表れていた。医学の知識を持つキーツは病状の深刻さをはっきりと認識していた。

Works Cited

- 赤川 裕『英国ガーデン物語：庭園のエコロジー』東京：研究社、1997.
- Allott, Miriam. *The Poems of John Keats*. London: Longman, 1970.
- Bantock, Gavin. *Pioneers of English Poetry*. Tokyo: Kinseido, 1980.
- Bate, Jonathan. *John Keats*. Cambridge: Harvard University Press, 1966.
- . *The Songs of the Earth*. London: Picador, 2000.
- Bloom, Harold. *The Visionary Company*. New York: Doubleday & Company Inc., 1961.
- Charlesworth, Michael ed. *The English Garden: Literary Sources & Documents: The Eighteenth Century Opinions, Descriptions, Controversies*. 3 vols. East Sussex: Helm Information, 1993.
- Colvin, Sidney. *John Keats*. London: Macmillan, 1917.
- Coote, Stephen. *John Keats: A Life*. London: Hodder & Stoughton, 1995.
- D'Avanzo, M. L. *The Quest for Permanence: The Symbolism of Wordsworth Shelley and Keats*. Cambridge: Harvard University Press, 1959.
- Ende, S. A. *Keats and the Sublime*. New Haven: Yale University Press, 1976.
- Hebron, Stephen. *John Keats*. London: British Library, 2002.
- . *The Romantics and the British Landscape*. London: British Library, 2006.
- Hilton, Timothy. *Keats and his World*. London: Thames and Hudson, 1971.
- 川崎寿彦『楽園のイングランド』東京：河出書房新社、1991.

- Levinson, Marjorie. *Keats's Life of Allegory: The Origins of a Style*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Perkins, David. *The Quest for Permanence*. Cambridge: Harvard University Press, 1959.
- Roe, Nicholas. *John Keats*. London: Yale University Press, 2012.
- . *John Keats and the Culture of Dissent*. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- Rollins, Hyder E. ed. *Letters of John Keats*. 2 vols. Cambridge: Harvard University Press, 1958.
- Sperry, S. M. *Keats the Poet*. Princeton: Princeton University Press, 1973.
- . "The Allegory of *Endymion*." *John Keats*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1985.
- Vendler, Helen. *The Odes of John Keats*. Cambridge: Harvard University Press, 1983.
- White, R. S. *John Keats: A Literary Life*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2010.